

戦時下の宝塚

迫りくる戦争の足跡

昭和6年（1931年）9月18日、日本関東軍が満州の中国軍を攻撃し、満州事変が勃発しました。その後、中国との全面戦争に入り、日中戦争に突入するころから、国内においても将来の戦争における防空体制の確立が痛感され、軍民連携の防空演習が実施されるようになりました。それは、今後国民生活の場が戦場と化することを国民に予知させるものでありました。

軍需工業の進出と本土空襲

阪神工業地帯として、西宮、尼崎、伊丹に重工業・化学工業の工場が建設されるなかで、宝塚は比較的平穏な田園地帯でありましたが、軍需産業振興のあおりで昭和13年（1938年）には昭和ペアリング製造（株）の工場が、また、昭和15年（1940年）に川西航空機（株）の工場が建設されました。

宝塚新温泉の接收と宝塚海軍航空隊

昭和19年（1944年）3月の非常措置令により宝塚大劇場は閉鎖されることになり、遊園地のみが宝塚厚生遊園地として営業を続けましたが、6月には宝塚新温泉施設が海軍に接收されることになりました。



宝塚海軍航空隊水泳訓練

接收された施設には滋賀海軍航空隊奈良分遣隊予科練習生約千名が入隊し、滋賀海軍航空隊宝塚分遣隊が発足しました。

その後、昭和20年（1945年）3月には宝塚分遣隊は独立し、宝塚海軍航空隊と改名しました。この間、常時3500名から4000名の海軍将兵が宝塚大劇場をはじめ諸施設を利用して生活していました。



宝塚海軍航空隊練兵場